

文体の罣に陥る危険性から免れていることである。第23章では、とくに散文の「韻律」の観点から簡潔さと文彩の豊かさとの力学的な並存が論じられる。散文の「韻律」は古典ラテン語において母音の長短の長さの組み合わせで決定されていたが、もはやその組み合わせのハーモニーを感じる耳を持たない16世紀ユマニストからは、ゴルギアス文彩の与えるシメトリー効果として理解されていた。カルヴァンは、二分法、三分法的リズムのペリオッド文体に聴感的ハーモニーを増幅するためにゴルギアス文彩による「韻律」を多用した(同一構造の従属節、とくに節の末尾での同一あるいは類似語尾の反復)。この豊かさ・増幅は各従属節の切れ目を明確に示すところから、カルヴァンの文彩の豊かさは、エラスムス風の自由奔放で豊かな文彩と異なり、簡潔な印象を与える。第24章では、同テーマの反復と変奏というカルヴァンの文体の重要な特徴でありながら従来の研究では等閑にふされていた点、および警句的表現の、議論全体の伝統的な構成の中で占める位置および「教化」と「感動」の説得的効果について論じる。

第四部「ラテン語からフランス語へ」では、カルヴァンにおける両言語の並存を、第一にカルヴァンがラテン語で考えラテン語修辞学の遺産を参照しつつ、フランス語で著作をおこなったという共時的レベルの意味で、第二にまた初期の1535-1537年以来つねにラテン語・フランス語で著作活動を行っていたという通時的レベルの意味で確認する。そして、初期仏語作品の重要性、各言語に対応する異なる読者層の存在を指摘し、カルヴァンのフランス語文体が、彼自身のラテン語著作の仏訳や説教活動によって徐々に確立していったという、ある意味では正しい通念にニュアンスを与える。第25章では、1530年から1560年までのカルヴァンの著作活動を、神学的知識の普及とフランス語の顕揚という二つの観点から分析し、『キリスト教綱要』各版における読者層の変化や、フランス語の理解し易さと美しさを追求しようとした当時におけるカルヴァンの独自の姿勢を指摘する。第26章では、『福音への躡き』のラテン語版からの仏訳と読者層との関係、第27章ではラテン語著作『デュシュマン宛て書簡』(1536)か

ら、全く別のフランス語著作『福音の真理を知った信者が教皇派の間におかれている状況でなすべき事柄について的小論』(1543)が生まれる過程が検証される。第28章では『キリスト教綱要』(1639)第17章のカルヴァン自身による仏訳(1541)とラ・プラースによる仏訳(1539-1541)との比較がなされる。以上24章から26章までの分析から得られる共通の結論は、ラテン語の文彩をフランス語に訳すときには、16世紀に大勢を占める逐語訳ではなく、17世紀になって「美しき不忠実な女性」と呼ばれる系統の、フランス語特有の文彩へと移しかえる翻訳がなされること、ラテン語修辞学にもとづく文彩の密度が一般の読者層の教養に合わせて薄まること、感情への訴えかけがより強まることがあげられる。最終第29章では、『キリスト教綱要』1541年版から、全く別の容貌を呈する1560年版への、著作家カルヴァンから説教師カルヴァンへの文体の変遷が論じられる。1560年版の特徴は、具体的かつ劇的な霊的神秘的言語の使用、激しい誹謗的文体の偏在、書き言葉の高尚な文体から、骨太で比喻に富む話し言葉の民衆向けの文体への変化などである。この文体的変遷をもたらした、著者自身の説教、聖書注解講座などの口頭の俗語活動の経験は、同時にラテン語文体にも逆照射されている。1559年のラテン語最終版では、従来の文学的洗練度が減少するかわりに口語的感情的表現が増加した。机上のユマニスト修辞家として始まり説教師として終わるカルヴァンの人生が、『キリスト教綱要』の変遷、羅仏両言語の相互作用にあらわれている。

本文の後には、便利な補遺・索引がつけられている。補遺は五つあり、第一は、『キリスト教綱要』のラテン語・フランス語各版の時代順の目録と著作中で参照したエディション、第二は、カルヴァンの著作の作家生存中に出版されたフランス語訳とラテン語訳の目録、第三は、聖書各書についての註解と説教の年代順目録、第四は、『キリスト教綱要』(1541)第17章のピエール・ド・ラ・プラースによる仏訳についての資料とポアチエ市立図書館に保存されている手稿について、第五は、著作中で言及された16世紀の論理学・修辞学のマニュアルと雄弁に関する著作の年代順目録である。索引は、カルヴァンの著作、聖書引用、固有